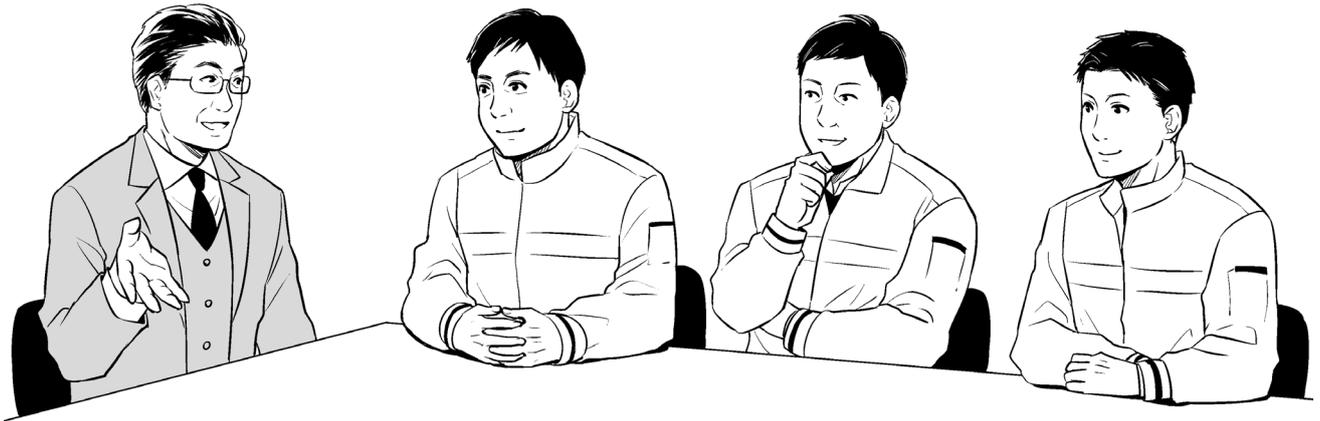


座談会「現在の採卵鶏の飼育システムについて」(2)

境野 明 アグリ・サポート株式会社 代表取締役
加園 岳大、関 淳一、武田 諒(日生研株式会社 営業部員)



前号に引き続き「現在の採卵鶏の飼育システムについて」をお送りする。2号目ではワクチン投与時の注意ポイントについて議論した。今後の飼養管理に役立てていただきたい。

加園：鶏舎のAI化、あるいは機械化がドラスティックに変わったのはいつ頃からですか。

境野：AI化まではいいませんが、精度の良いサーモスタット、換気コントロール(クーリング・パド)やカウンターなどの電子部品や高性能な装置が使われるようになったのは、ここ10年だと思います。

加園：これからの10年でAI化がある程度進んできて、疾病コントロールに対してある程度の終止符が打たれるように見えますか。

境野：いえ、病気に関しては、むしろリスクが高くなったと言えるのではないかと思います。昔は、ロットが小さかったので、点眼や注射で個体毎に接種していました。1羽1羽接種することが、ワクチンの抗体を上げるのには一番効果がありました。

関：昔は手をかけていたんですね。

境野：我々の世代の人たちというのは、個体管理をしなくてはと思っています。その延長線上で大きなロットならいいのですが、1ロット数十万羽に1羽1羽ワクチンを接種するのは現実には難しいことですので、簡便な接種方法を選択するのは現実仕方のないことです。

「飼養構造上からのワクチン投与の注意ポイント」

加園：ワクチンに関して言うと、飲水投与がだんだん主になっているという状況です。今の生産者の方が一番気を付けることというのは何ですか。

境野：飲水投与でもワクチンを確実にテイクさせるということが一番重要な(難しい)ことだと思っています。

加園：イメージ的には、パイプの清掃やパイプの傾きのチェック、鶏種によつての飲水量のチェック、過去と飲水量も変わってきていますか。

境野：飲水量は基本的には変わらないです。

加園：どのようなチェックが必要になってきますか。

境野：飲水投与する前に2~3時間断水して、鶏が喉を枯らして飲めるような状態にしますが、何十メートルもあるドリンクーのパイプは曲がってしまいます。パイプが弛んだりしているところの水を全部飲み切ったかという確認を昔はしていましたが、

今はその辺の確認ができていない養鶏場さんが多いように思います。水を切るには何時間かかるのか、パイプの中の水を全部抜いた後にワクチンの水が流せるかななどの検証している人が少ないです。ブルーダイの様なもの流して、端まで行ったのを確認して、「じゃ、行った」というふうに判断しています。本当にそうかということ、実はそうではありません。パイプの下部に水が残っていて、その上をブルーダイの水が流れているとかね。あるいは、薬液自動混入器で流すにしても、水道圧というのは一定ではありません。流れるときのスピードが違うのです。その都度ドリンカーのところに行くまでに濃度が違います。確実に1ドースを飲んでいるかといったら、私はかなり危ないと思っています。夏場は鶏舎内が暑くなり、ドリンカーの中も30℃以上になります。30℃ぐらいになると、生ワクチンは一気に劣化します。飲み終わるまでに3時間、4時間かかるとしたら、さらに劣化するわけじゃないですか。確実にワクチンがテイクしたかどうか抗体をチェックしていないところが結構あります。日生研としても毎度検査するのは、検査料もかかります。けれど、そういうリスクが伴うということを生産者側も認識して、テイクを確認するという意味で昔より検査が必要かもしれないですね。

加園：ワクチンメーカーの営業マンとしても、飲水投与に対するリスクの理解を深める、対策を熟知しないと駄目ですよ。

境野：どんなワクチンでも確実にテイクすれば、確実に効果があります。ワクチンをやったけれども効かなかったじゃないかという話をする方がいますが、それはワクチンが弱過ぎるのではなくて、確実にテイクできていないからそういう結果になるというのを分からない方が多いように思います。では現状の飼育形態、ロットが大きいという飼育形態の中で、確実性を狙うというのはどうするか。どういう方法が一番良いかといったら、個体でやるのが一番良いと思います。けれども、人的な問題も含めて、物理的に難しいとなると、簡便な方法を頼る。簡便な方法の中で、より抗体の確率を上げるといったら、同居感染になります。これほど良いものはないのではないかと思います。抗体が次へ行って、また次へ行くという、こういうワクチンであれば90%以上の確率で抗体を持たなくたって、80%ぐらい抗体を持てばいいとよく言いますもんね。その80%が、時間をかけて100%になるという。私はIBDのワクチンなんかを見れば、同居感染をするというメリットを最大限利用でき、近代的な今の大きなロットに対応するすごくいいワクチンかなと思います。

武田：なるほど。

境野：今の大手養鶏場は、要求率の改善などさまざまなメリットを享受するために、1ロット10万羽20万羽の体制に大きくなっている訳です。そこに提供される初生ヒナを同一種鶏からというのは不可能に近いです。種鶏日令違いの3ロット、4ロットを集約した10万羽なり15万羽なのです。種鶏や餌付日令が違うということは、母系抗体の推移も違います。若い種鶏の抗体は高い、アウト間際の種鶏の母系抗体は低い。それが一緒に10万羽で入ってくるから、当然バラバラな抗体価になっているわけです。特にIBDで見れば、じゃあ半減期はいつだって話です。昔は18日令と28日令とかでした。不活化をしっかり打っていたので、ワクチン接種日令は21日令と30日令ぐらいが良いタイミングでした。今は、相対的に母系抗体率が低くなって、種鶏の日令も様々で、とても大変です。この1ロット10万羽もの初生ヒナのIBDを完全にテイクさせるために、どういう日令で接種したら有効かと考えたときに、通常のマイルドタイプで確実に抗体価を得るのであれば3回、4回やらざるを得ないのが現状です。

加園：それぐらい抗体がバラバラだということですね。

境野：バラバラな抗体を揃えるには、大変な労力がかかります。それよりはある程度母系抗体が高くても、2回に絞ってワクチンテイク出来る中等毒のワクチンを選ぶ方が確実かと思います。ワクチンの副作用による育成率のダウンというのはないと思います。鶏が受けるストレスの量からすれば、3~4回ワクチンを接種するよりも、中等毒のワクチンで2回程度にした方が良いのではないかと私は思います。採卵鶏は生産に耐え得る体力を維持して、成鶏農場で約2年生産をしなればなりません。この期間、無事に健康で過ごすためには、昔も今もワクチンで鶏病のコントロールをしていかない限り、非常に難しいと言えます。大きなロットで、飼育は省力化されたといえども、1羽1羽接種しなければならないワクチンもあり、手を抜くということは、今後もやってはいけないと思います。その辺をしっかり踏まえた上で、ワクチンの提供だけでなく、ワクチンを的確にテイクさせる方法などの情報提供を今後も日生研としてやっていっていただければと思っています。

※ワクチンについての考え方は境野氏の個人的見解となります。